

■展覧会案内

テーマ展「中世の南部氏と糠部」

会期：平成29年9月23日（土）～11月26日（日） 会場：特別展示室

1 はじめに

当館では今秋、テーマ展「中世の南部氏と糠部」を開催します。本稿では展示の概要と主要な展示資料についてご紹介したいと思います。

さて、中世とはおよそ平安時代末期から戦国時代までを指しますが、この展覧会では中世の南部氏に関する諸資料の展示を通し、中世の諸相、当該期の南部氏や、糠部と称された岩手県北部から青森県東部の地域の歴史に関心を持っていただく端緒になればと考え、企画しました。

ところで、歴史研究で最も重視されるのは古文書や出土遺物などのいわゆる同時代資料です。中世の南部氏は大きく二系統からなっており、一方の根城南部氏（近世の遠野南部氏）には多くの貴重な古文書が伝存しています。今回はその影写本（＝精巧な複製、八戸市博物館所蔵）をお借りして展示する予定です。

他方、三戸南部氏（近世の盛岡藩主南部氏）には中世文書がほとんど伝存せず、そのことが研究を難しくしてきた面は否めません。しかし後述する通り、近年は三戸南部氏の居城・聖寿寺館跡（青森県南部町）の発掘調査が進められ、様々なことが解明されつつあります。今回は南部町教育委員会から数々の遺物をお借りして展示する機会が得られました。これらは県内初公開のものです。ぜひ皆様にも直接ご覧いただきたいと思ひます。

また、同時代資料に比べて資料的価値は劣りますが、近世の編纂資料に関しても見るべき点があります。仮に潤色があるにせよ、どの部分が虚構で、編纂者がどういう意図でそれを記述したのか、背景にはどのような歴史観があるのか、などを追究することも、大事な歴史研究の一部だと私は考えます。今回の展示でも、皆様にその一端を感じていただければ幸いです。

ば幸いです。

2 糠部という地域

「糠部」という地名の史料上の初見は、鎌倉幕府の歴史書『東鑑（吾妻鏡）』文治5年（1189）9月17日条所載、中尊寺衆徒らの「寺塔已下注文」です。この中には平泉藤原氏2代目の基衡が毛越寺建立にあたって仏師雲慶に与えた「功物」の中に「糠部駿馬五十疋」があったという記述が含まれており、ここから馬産地としての糠部という地域像がみとれます。



写真1：東鑑

一方「糠部郡」の初見史料は、寛元4年（1246）の「北条時頼下文」（常陸宇都宮文書、『鎌倉遺文』所収）です。この文書は展示資料に含みませんが、注目すべき内容を含むので簡単にご紹介します。これは、鎌倉幕府5代執権時頼が陸奥国糠部郡五戸（現在の青森県五戸町）の地頭代に平盛時を任命した際の文書です。地頭代は地頭の代官で、通常は地頭自身が任命します。平盛時は北条得宗家（北条氏の嫡流）に仕える被官、いわゆる御内人としてその名を知られています。つまりこの文書からは、時頼が生きた13世紀半ば時点で既に糠部郡（の一部）が北条得宗家領だったこと、時頼は自分の配下の盛時に五戸の支配を代行させたこと、の二点がわかるのです。

これより後、14世紀前半に鎌倉幕府が滅亡して建武の新政が始まると、陸奥国（現在の青森・岩手・宮城・福島）の四

ようになります。この頃、旧幕府方とみられる武士たちから没収された所領が、後醍醐天皇方で戦功をあげた者たちに与えられます。この際、その実務を任せられた人物の中に南部師行（根城南部氏4代当主）の名がみえます。これが、糠部と南部氏の接点が明確に同時代資料上に現れる、比較的古い事例です。

3 南部氏の発祥と展開

①発祥

南部氏は八幡太郎義家の弟、新羅三郎義光を祖とする甲斐源氏の一族です。義光は後三年合戦の際、苦戦する兄義家を助けるために官職を辞して都から奥州へ駆けつけたことや、笙の名手としても知られています。また、後年その子孫にあたる南部氏が根付いた糠部の地には、義光を祭る「新羅神社」が複数存在します。



写真2：後三年合戦絵巻



写真3：新羅神社（南部町）

義光の後、子の義清、孫の清光は当初常陸国（現在の茨城県）に居住していましたが、現地の豪族と抗争に及び、朝廷から処罰される形で甲斐国（現在の山梨県）へと移ります。さらに清光の子（あるいは弟）の加賀美遠光は、源頼朝に従い数々の軍功を立て、一族は甲斐

国、信濃国（現在の長野県）で繁栄しました。この遠光の三男が光行で、甲斐国南部郷（山梨県南部町）を領有し、この地を名字の地とする南部氏の歴史がここに始まったとされています。

初代光行、2代実光、3代時実の動向は、前出の『東鑑（吾妻鏡）』の中にも記述があります。それらからわかることは、彼らの名が将軍家随兵として度々登場すること、弘長元年（1261）及び弘長3年（1263）条にみえる実光・時実は、5代執権北条時頼の側近的な存在として描かれていることの二点です。つまり南部氏は鎌倉幕府に仕える御家人であると同時に、御内人（的な）存在だったとみるのが妥当だと考えられます。

②南北朝時代の南部氏

鎌倉後期以降、資料上に南部氏の名を確認するのは難しくなりますが、次の南北朝時代、殊に冒頭の建武政権下では、南部時長・師行・政長の三兄弟が台頭します。彼らは、初代光行の子実長の系統（根城南部氏）に属し、光行の二男実光を祖とする三戸南部氏とは別系統です。

このうち師行は陸奥守北畠顕家から北奥の奉行（国代）に抜擢され、糠部郡八戸の根城（現在の青森県八戸市）に拠って、南部氏の基盤を確立します。彼らは南朝方に属して勢力を拡大しました。

また、正平21年（1366）8月15日付「四戸八幡宮神役注文書」（南部家文書）という資料が存在します。これは糠部郡の四戸八幡宮（櫛引八幡宮）で行われる「放生会」での様々な役を全部に配分した文書です。この文書で注目すべきは、全部に指示をするだけの実力を有する差出人「大膳権大夫」の存在です。この差出人は、官途名からみて三戸南部氏13代当主守行とみなす説が存在します。この見立てに立脚すれば、この

時までには三戸南部氏が根城南部氏に代わり一門の中心的地位を占めていたということになりますが、これは推測に依拠した見解になってしまうため、今後とも検討を重ねていく必要があると思われます。

③長胴太鼓の墨書銘

ここで長胴太鼓（天台寺蔵）という貴重な資料をご紹介します。



写真4：長胴太鼓（天台寺蔵）

この太鼓は鎌倉時代後期から南北朝時代初期に製作されたと推測されるもので、天台寺（岩手県二戸市）に所蔵されてきました。胴部の内側には6種類の墨書銘が残されており、残念ながら最も古い銘文（造立銘）は削り取られています。それ以外の墨書銘は張り替え時のもので、元中9年（1392）に修理を行ったことがわかります。

当時は南北朝時代で、南朝・北朝各々が異なる元号を用いていました。この「元中」は南朝元号であることから、当地の支配者は南朝方に属していた可能性が想定されます。但しそれが三戸南部氏であったか否かは、さらなる検討を要します。

④室町時代の三戸南部氏と聖寿寺館

同時代の文献資料上で三戸南部氏の名を探ると、例えば『看聞日記』（伏見宮貞成親王の日記）応永25年（1418）8月10日条に「関東大名南部上洛、馬百疋、金千両室町殿へ献上した云々」とあります。この資料も展示は行いませんが、重要なものなのでここでご説明します。

本文中の「関東」とは本来、いわゆる

関東地方を指す語ですが、当時は室町幕府の出先機関として関東に鎌倉府が置かれており、その管轄区域には東北地方も含まれます。この点を勘案すると、これは陸奥国の大名である南部氏（時期的には三戸南部氏13代守行）が上洛し、馬や金を4代將軍足利義持に献上したと考えることが可能です。

ところで、三戸南部氏は金や馬を将軍へ献上するだけの実力を本当に備えていたのでしょうか。

その答えは、三戸南部氏の居館・聖寿寺館跡の出土遺物によって導き出されます。金箔土器、陶磁器といった、政治力や経済力を反映した、いわゆる「威信材」が多く出土していること、城館の規模の大きさなどからみて、三戸南部氏は東北地方有数の勢力を誇る武家であったことが明らかにされつつあります。

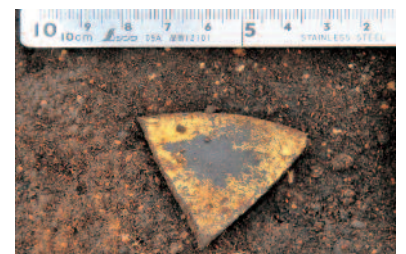


写真5：金箔土器

4 おわりに

聖寿寺館は、三戸南部氏24代晴政の時、家臣の放火で焼亡したと伝えられています。その後三戸南部氏は居城を三戸城（青森県三戸町）、九戸合戦の終結後には福岡城（修築された九戸城、岩手県二戸市）、さらに盛岡城と移し、近世の盛岡藩主南部氏としての新しい歴史が始まりました。

尚、ここで言及しなかったものも含め、本テーマ展では中世の南部氏や糠部に関連する様々な資料を展示します。前述の通り県内初公開の資料もご紹介します。ぜひご来館の上、ご覧ください。

（専門学芸員 佐々木康裕）